

## 【別添 1】

13	東京学芸大学附属世田谷小学校	R1～R5
----	----------------	-------

# 令和5年度研究開発実施報告書（要約）

## 1 研究開発課題

未来を創造的に生きる「学びを自分でデザインする子」を育成する、Laboratory・Home・Classの3領域で学ぶ教育課程及び学習環境デザインの研究開発

## 2 研究の概要（別紙1：研究の概要図）

次世代を担う子どもを育成するために「学びを自分でデザインする子ども」を育む教育課程を考えた。学びをデザインするとは、「学びが自分（たち）のものであると自覚し、学びの目標、道筋、表現方法を思考し選択している」ことと本校では定めた。

子どもが主体的に学びをデザインする領域として、LaboratoryとHomeの領域を設定した。Laboratoryにおいては、学ぶ内容も方法も、成果物の表現手段も子ども自身で選ぶ。Homeでは、1年生から6年生からなる異年齢集団で誰にとってもよりよい生活づくりを目指す。Classの領域では、教科固有の見方・考え方、問題発見や問題解決に資する資質・能力の習得とその過程を通して汎用的なスキルを習得することを目指す。

この3領域で学ぶことで、子どもは学びをデザインするための資質・能力を育みながら、それらを活かして探究的、創造的活動に繰り返し学びをデザインする。

## 3 研究の目的と仮説等

### （1）研究仮説

子どもが学びを自分でデザインするために必要な資質・能力を習得させ、それらが発揮できるデザイン実践する場を設けることにより、「学びを自分でデザインする子」を育むことができると仮説を立てた。

### （2）教育課程の特例

各教科・領域における標準時数を減らし、その分を探究的な学習であるLaboratoryと異年齢集団で生活を共にしながら学ぶ場であるHomeを設定する。教育課程をLaboratory, Home, Classの3領域から成るものとする。

授業の基本単位として1時間分を40分間とする。

Laboratoryは、第3学年以上に前期と後期を設定し、開設準備期間を除き週4時間を基本とする。年間124時間（3年生は62時間）とする。

Homeは、水曜日を除き朝と昼に1時間ずつ行う。年間280時間とする。

Homeの時間が多いため、教科学習であるClassの時数を削減する。教科ごとの削減割合は異なるが、小学校6年間の各教科のカリキュラムを精査し、学びのデザインに支障がないように圧縮・削減する。詳しくは、別紙2教育課程表に載せる。

## 4 研究内容

### （1）教育課程の内容

子どもが学んだことを自由自在に活かし、よりよい学びを起こす、延いて充実した人生を送ることを実現するために学びの意義を感じられること、学びにおいて自己効力感をもつことを図った教

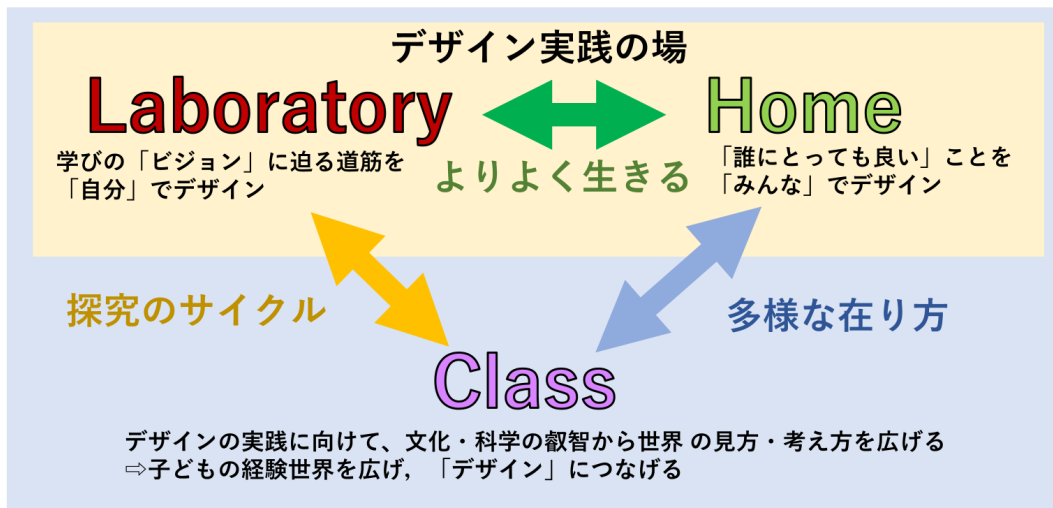
育課程を計画し指導を行う。

Class（教科学習）では、教科、学年、単元と区分けされた学習を行うが、子ども自身が区分けされた枠に囚われることなく見方・考え方や資質・能力を発揮することを促す。そのために、6年間の学習を内容面・技能面でのつながりを全教員で検討し、教科横断的・学年縦断的に組織することで、ある場面での学びが他の場面に関連させやすいカリキュラムを作成する。単元の指導計画を作成する際には、個人が考えをもつ段階、他者と対話をして考えを深化・拡張させる段階、学びを振り返り学び方自体をメタに捉える段階を設け、これを全学年・全教科において行う。ただし、知識・技能の習得が主となる単元もあり、この限りではない。指導方法では、上述した計画を実施するために一人一人が考えをもてる発問や教材、対話の必然性のある学習課題の設定、振り返りではタブレット端末でMetaMoji社「ClassRoom」を用いてポートフォリオを作成し、経年的にも活用できるようにする。

Laboratoryは、デザイン実践の場である。学びをデザインするとは、「学びが自分（たち）のものであると自覚し、学びの目標、道筋、表現方法を思考し選択している」としているため、学習内容は予め決めていない。Laboratoryでの探究内容が次のLaboratoryのきっかけになることもあるし、Classでの学習内容の深化・拡張がLaboratoryの種になることもある。外部から見て、ある基準に到達する学びではなく、子ども自身が学びをデザインしている状態を保ち続ける環境をLaboratoryとして教育課程に置く。しかし、子どもの選択すべてがLaboratoryとして成立するわけではなく、Classにおいて育ったであろう教科固有の資質・能力、働かせた見方・考え方の発揮、もしくは汎用的なスキルや態度・価値の発揮を各Laboratory担当教員が期待できなければ活動は成立しない。汎用的なスキル、態度・価値については、東京学芸大学が「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクト（2015から2017）において作成した尺度項目を用いる。Laboratoryの担当者は、期待したスキル・態度・価値が発揮できるよう子どもを支える。

Homeもデザイン実践の場である。Homeは1～6年生からなる異年齢の集団である。小学校における学び集団の成員の多様性を高めることにより、異質な他者を顕在化させる。その集団で何らかの意思決定をする際に、公正さを保とうとすると、年齢や能力、性別などの成員間の差異を考慮しなければならない。Homeでは生活をデザインするが、Laboratoryでの学習者個人が主体となるデザインと異なり、公共における自身の在り方に目を向けることが主となる。これはHome内のことだけでなく、校内のHome同士は同じ空間で生活を共にする関係であるため、Home間においても公正さ、公共性を念頭に生活デザインを行う。延いては、学校外の他のあらゆる集団との関係においても公正さ、公共性を考え意思決定や社会をデザインすることを期待している。生活デザインの機会を設けるために、日常的にHomeで食事や清掃、遊びを行う。また、入学や卒業の時期に儀式的行事をつくることや宿泊行事などをカリキュラムとして設定する。Home担当教員は子どもの生活デザインを見守りながら、公正さ、公共性が保てるように支援する。

3領域の関係を下に示す。LaboratoryとHomeはデザイン実践の場であるが、先述したようにLaboratoryにおいては、個が主体となり、Homeでは他者との関係性を軸として自己の在り方をデザインする。これは、将来的な個としての幸福追求と社会の維持・発展への参画への期待にも対応する。Classにおいて習得した見方・考え方や資質・能力を自在に使いこなすことがLaboratoryでの探究を支えること、Laboratoryでの学びの経験によりClassの学習内容である文化・科学の叡智に必要性や意義を感じることを図る。また、Classで一人一人が多様に考え対話を通して考えを深化・拡張させることが、Homeにおいて異質な他者を受容すること、Homeでの他者との関係性を軸としたデザインの経験がClassにおける異なる考えの受容や対話を支えることを図る。



下図は、週時程である。子どもは、Home 教室へ登校し朝の活動を行う。その後、Class 教室へ移動し教科学習を行う。教科ごとに教室が違うため毎時間、教室移動を行う。昼は Home にもどり、昼食をとり、Home の活動をする。火曜日と木曜日の 5・6 校時は基本的に 3～6 年生は Laboratory の時間になる。

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8:20~9:00	40分	Home (朝の会・Home活動)				
	10分					
9:10~9:50	40分	Class 教科学習 40分×4コマ×週5日 1・2年生：低学年総合 3～6年生：専科制（教員のいる教室に移動）				
10:00~10:40	40分					
中休み	20分					
11:00~11:40	40分					
11:50~12:30	40分					
12:30~13:50	80分	Home (給食・掃除・Home活動)				
	10分					
14:00~15:20	80分	Home 代表者会議	Laboratory		Laboratory	Home

Home では、上述したように異年齢集団でよりよい生活を目指し、デザインする。掃除や給食などの当番、係活動、遊びの在り方が、Home 領域の対象になるが、それらを検討する際には下の 4 点について考慮するように年度当初に子どもたちには伝えている。端的には、自分と同じような判断を誰が行っても良いだろうか、他の Home が同じようなことをしても良いだろうかという視点で常に振り返ることになる。月曜日の 6 校時には Home 代表者会議がある。Home 内だけで完結するのではなく、他 Home に情報を開示し自分達の小さな社会が

## Homeで大事にする考え

- 1

年れいや性別などをこえて、みんなであつていく

2

「自分にとってよいこと」が「他人にとってよいこと」であるか話し合っ決めて

3

自分と自分以外のすべての人のことを考える

4

約束は、よりよいものに向けて新しくしていくことができる

透過性をもっているか確認する。各種行事の内容や進捗の確認もここでされる。

## (2) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「学びを自分でデザインする子」を育むための教育課程の編成についての検討</li> <li>○新設「じぶんdeラボ」と「みんなdeラボ」</li> <li>○校内授業研究会の実施</li> <li>○本校の研究開発課題に関わる研究開発指定校の視察（1人1回）</li> <li>○公開授業研究会の実施（1月31日（金））</li> <li>○「じぶんdeラボ」の時間の試行の反省を踏まえた2年次の教育課程の構成と研究開発組織の再編</li> <li>○「みんなdeラボ」の時間の実施方法の検討</li> </ul>
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「学びを自分でデザインする子」を育成する学校としての理念や哲学の構築</li> <li>○主体的で民主的な研究運営・体制への変革と意思決定システムの見直し</li> <li>○各教科学習の質を高め、新設時間の開始に伴う、教員の働き方の改善のための教科担任制の導入の是非の検討。</li> <li>○「研究室」によるLaboratory（「じぶんdeラボ」及び「みんなdeラボ」）の実施と細やかな情報共有を通じた具体的な実施計画の立案と実施、修正を通して成果と課題の明確化。</li> <li>○「みんなdeラボ」の異学年集団で協働的に問題を発見したり、解決したり、リーダーシップやフォロアースhipを發揮していくような機能を実現する枠組み（Home）の構築</li> <li>○研究部及び学習資料部によるオンライン学習システムの検討</li> <li>○先進的な研究をしている学校の視察や研究会、研修への参加</li> <li>○校内授業研究会におけるLaboratoryの学習環境デザインの研究と児童の評価方法の検討</li> </ul>
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○これまでの研究を経て「学びを自分でデザインする子」の育成する教育課程の全面実施（4月）</li> <li>○保護者説明会の実施（4月）</li> <li>○校内研究授業（6月、9月、10月）</li> <li>○研究発表会にむけて、研究の総括（12月）</li> <li>○研究発表会（2月18日）</li> <li>○Laboratory, Home, Classにおける課題の整理と次年度への改善案の策定（3月）</li> </ul>
第四年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第3年次までの研究を経て「学びを自分でデザインする子」の育成する教育課程の改定実施（4月）</li> <li>○運営指導委員会（5月、8月、12月）の実施</li> <li>○校内研究授業（5月）</li> <li>○研究発表会（6月18日）</li> <li>○研究開発学校事業最終年度以降の学校の在り方の検討（6月）</li> <li>○本研究の継続に関する検討（9～1月）</li> </ul>

### (3) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○運営指導委員会の開催（5月, 8月, 2月）</li> <li>○「学びを自分でデザインする子」の評価方法の検討</li> <li>○校内授業研究会の実施</li> <li>○「学びを自分でデザインする子」を育むための新たな教育課程における各教科や新設時間で育てたい資質・能力の整理とそれに伴う教科の主要な概念の抽出及び教科間で架橋することができると思定される概念の整理</li> <li>○公開授業研究会の実施（1月31日（金））</li> <li>○抽出学年である第3学年の現状の調査方法の検討と実施</li> <li>○「じぶんdeラボ」の時間の試行の反省を踏まえた2年次の教育課程の構成と研究開発組織の再編</li> </ul>
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「学びを自分でデザインする子」を育成する学校としての理念や哲学の構築</li> <li>○主体的で民主的な研究運営・体制への変革と意思決定システムの見直し</li> <li>○1年次に計画した教育課程を実施し、「教科の本質」を明確にしたカリキュラムが新設時間「じぶんdeラボ」及び「みんなdeラボ」にどのように影響を及ぼすのか, またその逆に教科学習にどのような影響を及ぼすのか, そして子どもの学びの質は本当に保証できたのかを検証し, その成果と修正すべき課題を明確にする。</li> <li>○各教科学習の質を高め, 新設時間の開始に伴う, 教員の働き方の改善のための教科担任制の導入の是非の検討。</li> <li>○「研究室」によるLaboratory（「じぶんdeラボ」及び「みんなdeラボ」）の実施と細やかな情報共有を通じた具体的な実施計画の立案と実施, 修正を通して成果と課題の明確化。</li> <li>○学びを自分でデザインする子を育成する評価のあり方の検討</li> <li>○先進的な研究をしている学校の視察や研究会, 研修への参加</li> <li>○運営指導委員会（6月初旬・11月中旬・2月中旬）の開催</li> <li>○抽出学年である第4学年の現状調査</li> <li>○校内授業研究会におけるLaboratoryの学習環境デザインの研究と児童の評価方法の検討</li> <li>○各委員会の定例開催と年度末評価</li> <li>○保護者説明会の実施（4月・3月）</li> </ul>
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「学びを自分でデザインする子」を育成する評価方法, 教育課程についての共通理解づくり（4月末）</li> <li>○校内研究授業（6月, 9月, 10月） <ul style="list-style-type: none"> <li>スポーツラボ</li> <li>食ラボ</li> <li>プロフェッショナル・ラボ</li> </ul> </li> <li>○児童アンケート（「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトでの汎用的スキル, 態度・価値の測定尺度の援用）の実施（全学年, 5月, 9月, 12月）</li> <li>○「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトでの汎用的スキル, 態度・価値の測定尺度のついて作成者（運営指導委員）からの助言（7月）</li> <li>○Laboratory, Home, Classの学習環境デザインの研究と児童の評価方法についての</li> </ul>

	<p>共通了解づくり（8月）</p> <p>○文部科学省によるオンラインヒアリング（8月）</p> <p>○運営指導委員会（8月・12月・3月）の実施</p> <p>○研究発表会にむけて、研究の総括（12月）</p> <p>○研究発表会（2月18日）</p>
第四年次	<p>○運営指導委員会（5月, 8月, 12月）の実施</p> <p>○校内研究授業 第5学年 家庭科（5月）</p> <p>○研究発表会（6月18日）</p> <p>○研究開発学校事業最終年度以降の学校の在り方の検討（6月）</p> <p>○本研究の継続に関する検討（9～1月）</p> <p>○児童アンケート（ClassとLaboratoryのつながりについて, Homeとはどのような時間・場所かについて）の実施（全学年, 12月）</p>

## 5 研究開発の成果

### （1）実施による効果

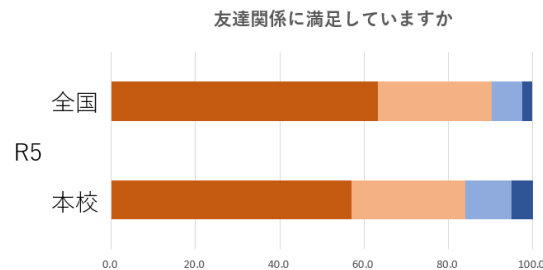
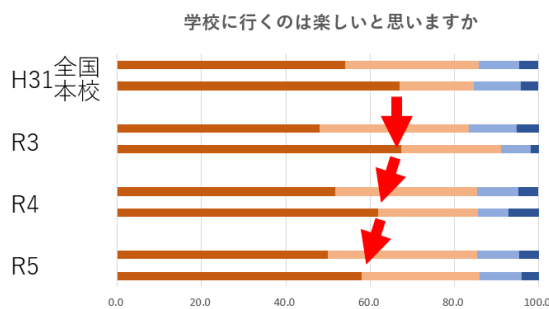
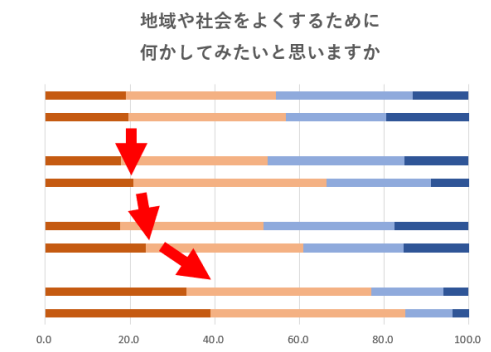
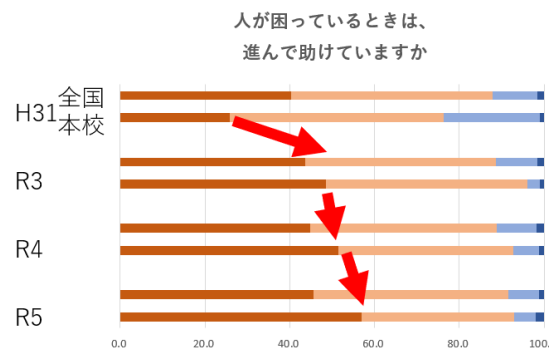
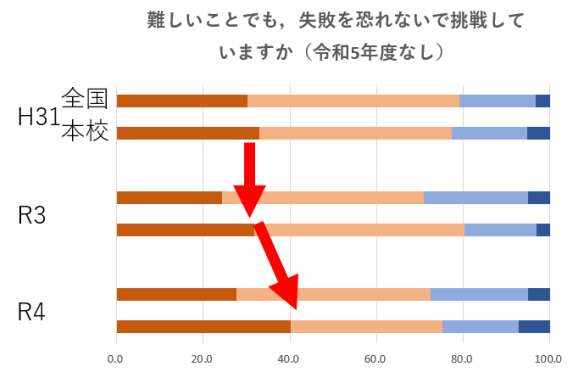
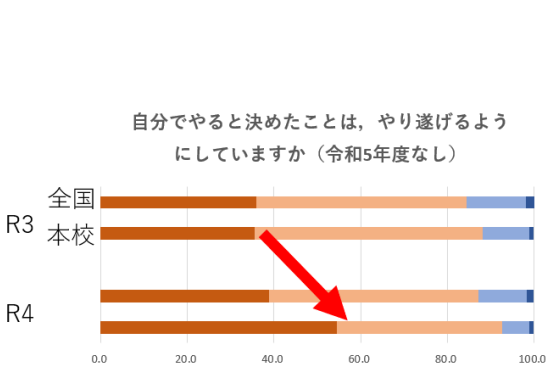
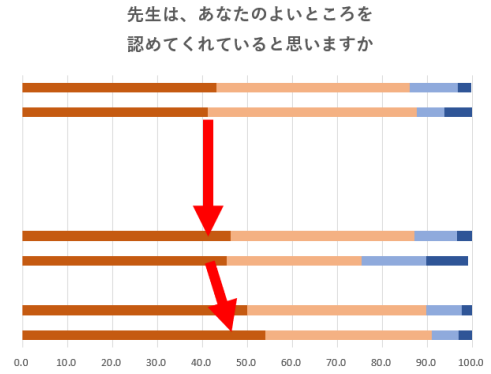
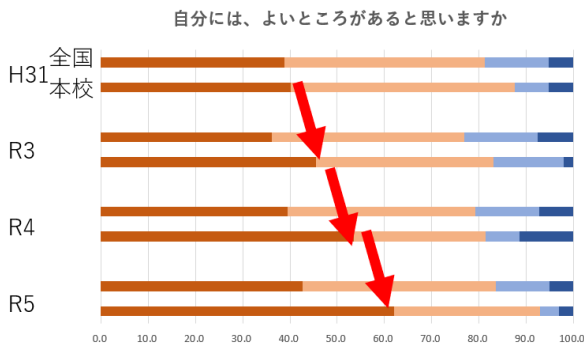
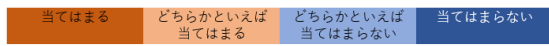
#### ・児童における変化

全国学力・学習状況調査からは、自己肯定感、責任感、チャレンジ精神、学習の活用、他者への共感性と援助行動、社会をよりよくする態度などにおいてポジティブな変化が見られた。ネガティブな変化としては、学校へ行くことの楽しさ、友人関係への満足度が下がった。

児童が活動する領域が Laboratory, Home, Class と複数になり、個人のもつ長所を出すことができる機会が増えたこと、複数の教員が関わり多面的に評価することで児童が承認される観点が増え自己肯定感の向上に影響していると考ええる。

Laboratory や Home では、試行錯誤する時間が保障されており、そこでの自己決定の機会や失敗を振り返り、次の改善に挑む様子が見られた。また、Class で学んだ教科学習の内容や見方・考え方を使うことが増えた。これらのことが、責任感、チャレンジ精神、学習の活用度合いに影響を与えたと考えた。Home では、異年齢による他者との異質さが目立つ環境であり、違って当たり前であることを前提とする指導をしている。同級生の目を気にするような同調圧力や集団内の優劣を競争するような圧力も同学年集団よりも低い。これらの影響か、食事や掃除、遊びなどの生活面では援助行動を起こしやすいし、援助要請もしやすいと考える。このことが、他者への共感性や援助行動への意欲になっていると考えた。

Home で生活することは、上述したような面もあるが、自分勝手や仲間内だけの心地よさは認められない。学校内での Home の時間を設けたことにより、これまで学級や学年で行っていたような運動会や宿泊行事などは目的も方法も変更した。そのことを惜しむ声が高学年（現6年生は、4年生までは従来の教育課程で学んだ）の児童や保護者を中心に散見される。このことは学校の楽しさや友人関係への満足度に負の影響があると考ええる。



### ・教員における変化

前項で述べた変化は、教員へのアンケートにも多く見られる。関わる児童が増えたことにより、顔と名前が一致する児童が増え、学校全体で児童の育成に臨んでいる感覚は以前よりも強まっているように感じる。これにより、児童からのあいさつや会話も増えた。

以前は学年・学級での矮小化された範囲で最適化が図られる面があった。現体制では、教科担任

制であり, Home 制であるため以前よりも個々の教員が最適化できる範囲が狭まっている。教員にとってはこれまで慣れ親しんだ学級経営や指導法が通用しないことにつながり, 学び直しや価値の転換を行う必要もあった。これを新しい価値の発見ややりがいと捉える教員とストレスを感じたり, 非合理的と判断したりする教員もいた。

#### ・学校運営における変化

教員個人の裁量が狭まったことは上で述べた。個々の教員の影響力が均されることと共通の判断基準をもって指導に臨むことは, 児童の様子とアンケート結果から概ね, ポジティブな要因になっていると考える。学校運営上も, 透明性が高まり, 一部の業務の効率化にもつながる。教員の指導力や内容の差による不平等感も薄まり子ども, 保護者にとってもより平等で公正な学校運営につながる。

教科担任制や Home 制によって, 教務上の時間割作成や学校内外への連絡, 学籍管理, 会計などのシステムが変更になり令和4年度の3領域全面実施初期には混乱と疲弊を招いたが, 2年目は低減することができた。これらは継続的に改善することが可能である。

#### ・保護者における変化

令和4年度の3領域全面実施時の6年生は最後の1年間で新教育課程に変わり, また新型コロナウイルス対策のため様々な活動が制限された。こうした状況は, 保護者に失望と混乱を生じさせる要因となった。

Laboratory においては, 児童の好きなことができていて楽しそうであることや学びをデザインすることの価値への共感から9割近く肯定的な評価を受けている。一方で, 自主的に学ぶことが難しい児童も2割ほどはいるため, 手厚い支援を望まれている。保護者も新しい価値観をもつ教育課程のため, 家庭での支えが教え込むことになるのではないかと戸惑う意見もアンケートには見られる。

Home は, 異年齢でいることの意味や価値は概ね通じ, 支持されている。上の学年が良い見本になり, モデルとなることへの肯定もあった。しかし, Home の理念が満たされず, 対話でなく, 年齢や身体や声の大きさに意思決定が行われた場面も実際に起きてしまい, そのような体験をした児童, 保護者は不安や不満を感じる。このようなことが起きないように指導と起きた場合にはその後の支援を丁寧に行う必要がある。

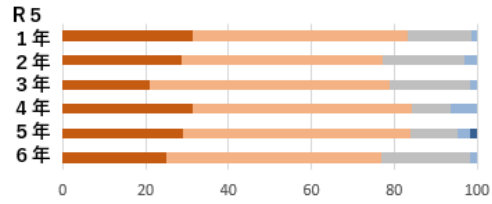
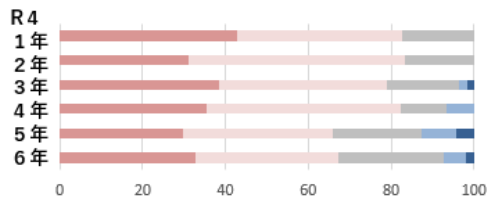
Class については, 定期的なテストや面談で児童の学習状況が具体的にわかるようになったこと, 教科担任制で授業の専門性が向上したことによる児童のポジティブな反応などから肯定的な意見が見られる。Home と Laboratory の設置により Class は授業時間数が標準時数よりも少ないため基礎学力の定着や中学校への進学の際の試験などにおいて不利益であるという否定的な意見もある。教科担任制のため教室移動や学習用具の管理などは従来の教育課程よりも複雑になっているため, 非効率的であるという意見がある。

様々な教員が関わることの利点を上述したが, 相談するための窓口が分かりづらいことや, 面談を行う Home 担任があまり情報を持っていないという不安や不満もあった。

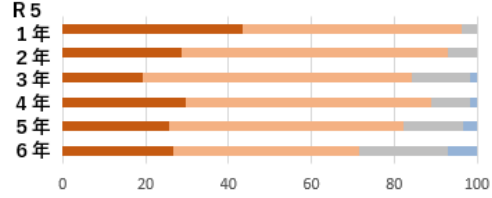
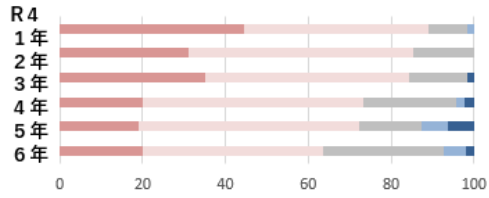
なお, 保護者アンケートの回収率は高くなく, 6割程度である。



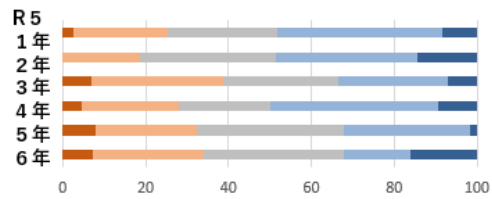
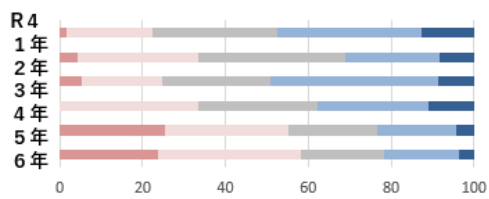
「Home」の時間において自ら意欲的に生活に取り組んでいると思いますか



「Home」の時間について新しい発見や成果はありますか

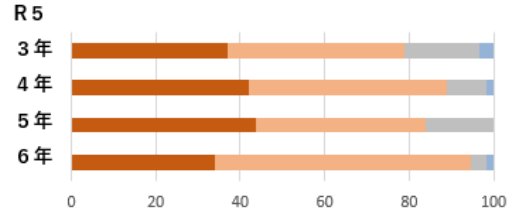
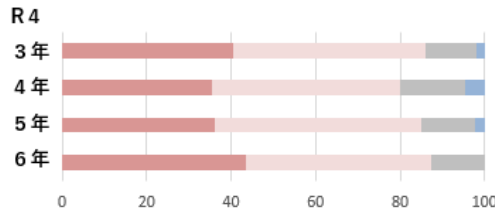


「Home」の時間について不安や課題はありますか

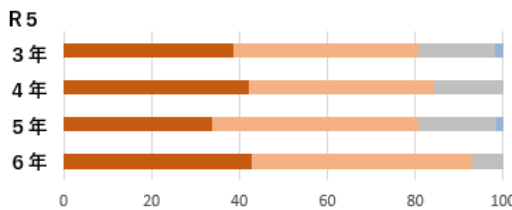
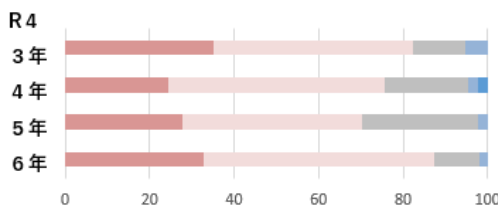


とてもそう思う    そう思う    どちらとも言えない    そう思わない    まったくそう思わない

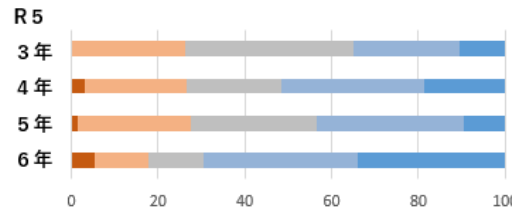
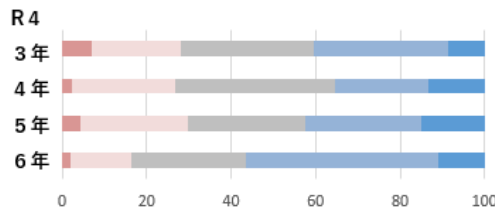
「Laboratory」の時間において自ら意欲的に研究に取り組んでいると思いますか



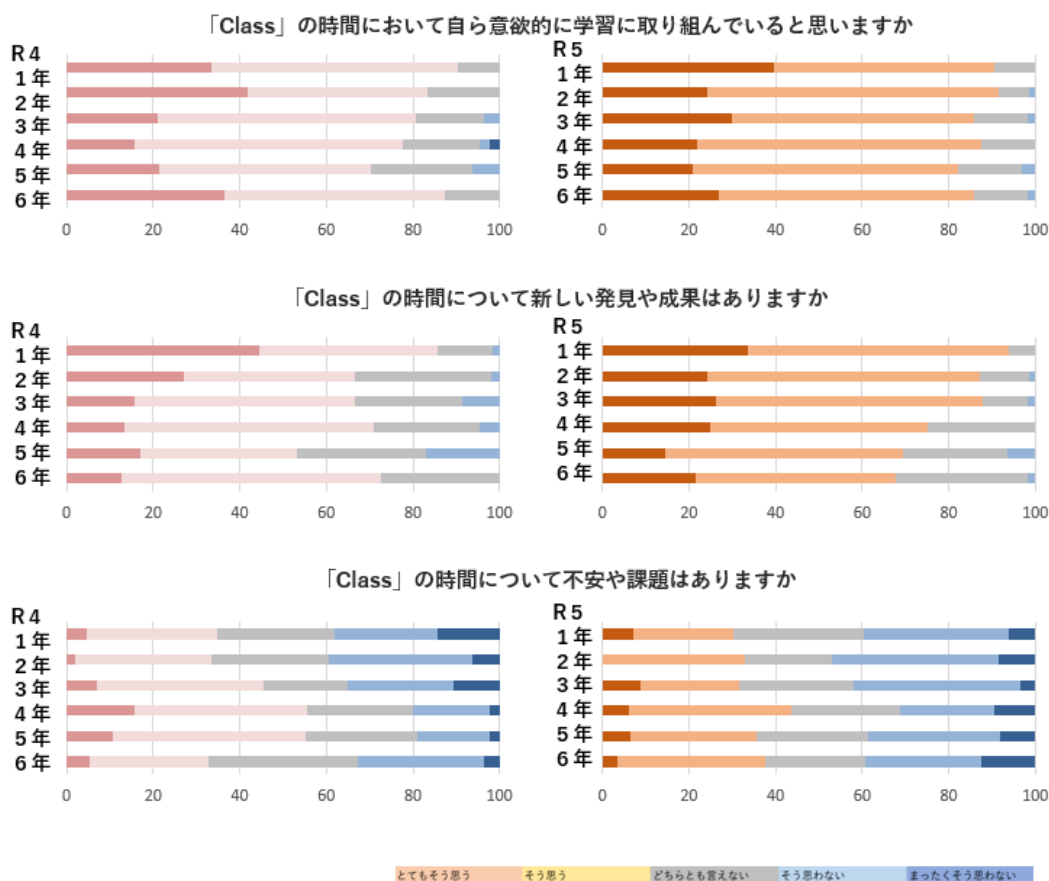
「Laboratory」の時間について新しい発見や成果はありますか



「Laboratory」の時間について不安や課題はありますか



とてもそう思う    そう思う    どちらとも言えない    そう思わない    まったくそう思わない



## (2) 実施上の問題点と今後の課題

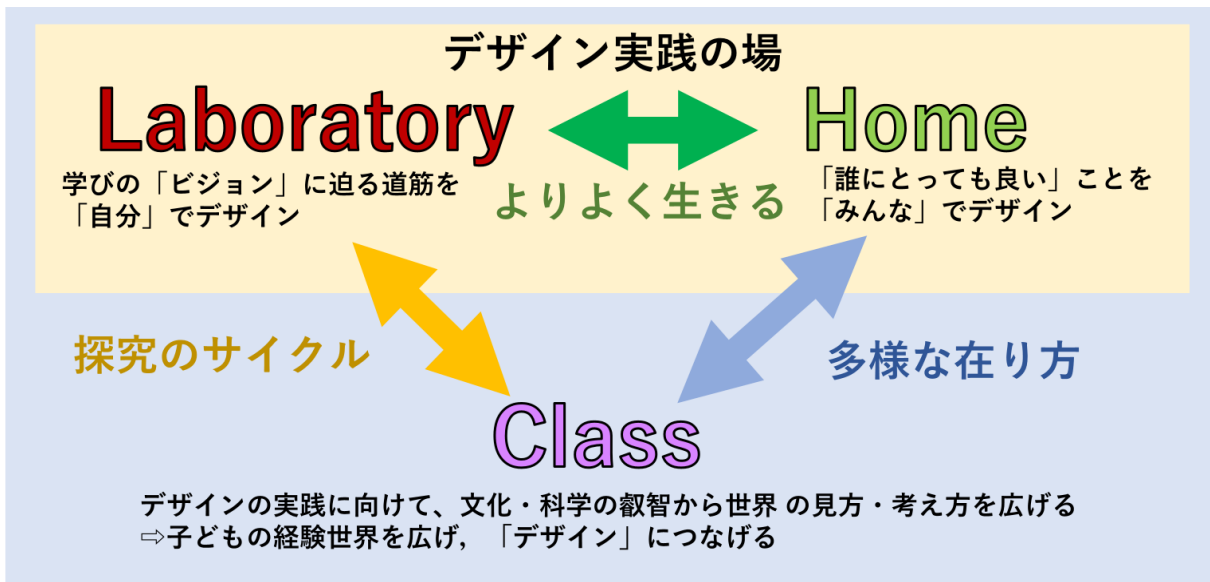
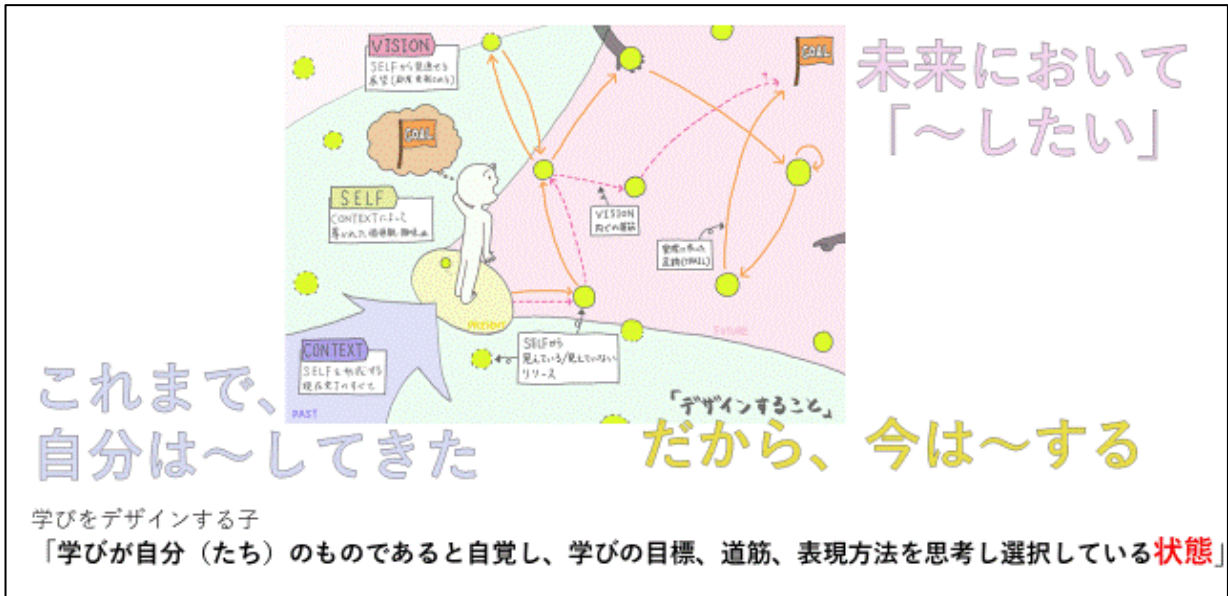
教育課程に大きな変更を加えたことによる変化も大きく、成果も見られたが課題も多く残った。児童、保護者の幸福を願い、丁寧な説明をして了解を得ることはどこまで行っても不十分であるため、反省とともに今後も励む。学校内の教職員にとっても変化は大きく、これも誠実に重ね続けていくようにする。

Home 制を実施したことに抜本的な変化は成果として明確に出ている。全国学力学習状況の調査において教員の実感を裏付けている。しかし、この成果は、Class 時数の削減や従来の教育課程にあった活動の削減などがある。一般化するには、精査が必要であることと、規模や程度の検討が必要である。

Laboratory も Home も探索的に実施し、実感としての成果はあるものの公教育にとって妥当であるための評価に関しては十分にできていない。教科学習である Class での学びが Laboratory でのデザインの基になっていることが児童アンケートからもわかるが、その相関や因果は明らかではない。

今後は、本研究の課題を真摯に対応しつつ、成果として見られたことについて精緻化・一般化していき、児童と保護者、公教育と地域へ還元することを図る。

2 研究の概要（別紙1：研究の概要図 ※様式自由）



【別添1】－別紙2

東京学芸大学附属世田谷小学校 教育課程表（令和5年度）

	Class										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	Laboratory	Home	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語							
第1学年	227 (-79)	/	107 (-29)	/	68 (-34)	44 (-24)	44 (-24)	/	80 (-22)	/	0 (-34)	/	0 (-34)	/	280 (+280)	850	
第2学年	230 (-85)	/	150 (-25)	/	70 (-35)	52 (-18)	52 (-18)	/	76 (-29)	/	0 (-34)	/	0 (-35)	/	280 (+280)	910	
第3学年	168 (-77)	53 (-17)	116 (-59)	71 (-19)	/	53 (-7)	53 (-7)	/	93 (-12)	/	0 (-35)	31 (-4)	0 (-70)	0 (-35)	62 (+62)	280 (+280)	980
第4学年	175 (-70)	58 (-65)	108 (-67)	71 (-34)	/	53 (-7)	53 (-7)	/	62 (-43)	/	0 (-35)	31 (-4)	0 (-70)	0 (-35)	124 (+124)	280 (+280)	1015
第5学年	98 (-77)	71 (-29)	105 (-70)	76 (-29)	/	44 (-6)	44 (-6)	53 (-7)	58 (-32)	62 (-8)	0 (-35)	/	0 (-70)	0 (-35)	124 (+124)	280 (+280)	1015
第6学年	98 (-77)	86 (-19)	95 (-80)	71 (-34)	/	44 (-6)	44 (-6)	49 (-6)	62 (-28)	62 (-8)	0 (-35)	/	0 (-70)	0 (-35)	124 (+124)	280 (+280)	1015
計	996 (-465)	268 (-97)	681 (-330)	289 (-116)	138 (-69)	290 (-68)	290 (-68)	102 (-13)	431 (-166)	124 (-16)	0 (-209)	62 (-8)	0 (-280)	0 (-209)	434 (+434)	1680 (+1680)	5785 (0)

※ 授業時数, 単位数の増減等については, 表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど, 教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

## 【別添1】－別紙3

### 学校等の概要

#### 1 学校名, 校長名

学校名 とうきょうがくげいだいがくふぞくせたがやしやうがっこう 東京学芸大学附属世田谷小学校

校長名 おいかわ けん 及川 研

#### 2 所在地, 電話番号, F A X 番号

所在地 〒158-0081 東京都世田谷区深沢 4-10-1

電話番号 03-5706-2131

FAX 番号 03-5706-2144

#### 3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数, 学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
105	3	102	3	102	3	101	3	97	3	101	3	608	18

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数

(高等学校の場合)

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	〇〇科										
	××科										
	計										
定時制	△△科										
計											

#### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	2	0	21	0	2	0	1	10
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
0	1	2	1	42						

#### 5 研究歴

記載する事項なし

## 【別添 2】

13	東京学芸大学附属世田谷小学校	R1～R5
----	----------------	-------

# 令和 5 年度研究開発自己評価書

## I 研究開発の内容

### 1 教育課程

#### (1) 編成した教育課程の特徴

「学びを自分でデザインする子」の育成を図り, Laboratory, Home, Class の 3 領域を設定した。Laboratory はいわゆる探究的な学習の場であるが, 子ども自身が個を主体として, 学習内容, 探究方法, 目標を設定できることに特徴がある。Home ではいわゆる異年齢集団での生活を通しての学びである。学校において, 第 1 学年から第 6 学年までの発達段階が大きく異なる集団で長期に渡り生活を共にし, 互いを尊重しながら意思決定をしていく場は特徴がある。Class はいわゆる教科学習である。汎用的なスキルの獲得と活用を図っている点と Laboratory と Home のために時数が標準時数よりも少なくなっている。

#### (2) 教育課程の内容は適切であったか

##### ・児童生徒の発達段階, 能力・適正, 興味・関心等の実態

Laboratory は第 3 学年から行うが, 自分に学習の主導権があることを望ましく思っている児童がほとんどである。しかし, 後述するように, 学年・発達段階に関わらず, 問いをもつことや, 探究や表現方法を自在に選択することは難しく, 教員による評価と支援も難しい。Home は, 導入時において通常の教育課程と異なることに負の感情をもつ児童も少なからずいたが, 年次の進行により大きく減少した。校内に同学年集団の学級だけでなく, 居場所があることや異年齢ならではの関わりを好ましく思う児童も多くいた。Class では, 教科担任制になり, 担当教員の教室まで荷物を持って移動する。時間や場所の把握, 持ち物の管理などで苦勞する児童も少なからずいた。教科担任制になり, 専門性が向上したことにより, 興味・関心をより引き出した面もある。

##### ・学年間, 学校段階間の教育課程の一貫性・継続性

Laboratory では, 児童自身が学びに向かうための力(資質・能力, 主体性等)をもっていないと学びに正対できないため, それをいかに育てるかが重要である。本研究では低学年における教科学習に触れていないが, 低学年期における学習はその後に大きく影響する。中学年以降のすべての教科学習も 6 年間の育ちを見越して行う必要がある。高等学校では, 探究科が令和 4 年度から必修となった。本校と同じ東京学芸大学の附属高等学校においても探究的学習の際の難しさはあり, 小学校段階から探究に慣れることや必要な力を身に付けておくことは学習の一貫性・継続性として効果的であると考えられる。附属世田谷中学校でも同様に探究的な学習を行っている。中学校では, テーマが先に決まっていることや知識や技能を習得する段階が明確にされていることが本校とは異なる。探究的な学習を行うことでは一貫しているが, 内容や方法は異なっている。小中高とどのように連携していくかの検討はこれからも行っていく必要がある。Home に関しては, 小学校のみである。異年齢での活動は, 中高でもあるが, Home での影響がどのように関連するか継続的に調査する必要がある。Class においても, 汎用的なスキルをどのように捉えるか, 教科と探究とのつながりをどう捉えるかは今後の検討事項である。

##### ・教科等間の連携性・関連性

Class で学んだことを Laboratory で発揮したり, Class と Class で縦横断したりすることを望ん

で年間計画を立て指導を行っている。しかし、教科担任制もあり、進度や内容の調整は難しさがあった。

### (3) 授業時間等についての工夫

授業1コマを40分間にして、できるだけ毎日、Homeの時間をとるようにした。教科担任制になり、時間割の作成は困難であった。時間割はAとBの2種類を用意し交互に用いた。振替休日などで特定の曜日が欠けることでの特定教科の授業時数の偏りを補うことや、教員の労務の平準化を図った。

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

Laboratoryでは、下図のように研究室を教員が開設し、第4学年から第6学年の児童は研究室訪問の上で希望順を記入した。1つのLaboratoryで25人を上限にして、希望順とこれまでのLaboratoryでの学びの連続性を考慮し配属を教員の会議で決定した。教員がLaboratoryを開設する基準は、子どもの学びを広く保証することであるため学びの対象や視点といった観点で多様性をもたせ

**ラボラトリー**  
一人一人が自分の学びを進めていく時間

自分の学びたいこと  
なりたいたい姿  
めざしたい姿  
に向かって

どういった目標や課題、  
表現方法が  
必要になるか

自分で考えたり  
自分で進んだりする

**Laboratoryでのよい学び**

- 自分で 問いや テーマを みつける
- 自分で 学びを進め、記録する
- 自分らしい オリジナルの 学び
- 仲間と、学びに 向かい続ける
- 自分で 学ぶ、仲間や 先生と 学ぶ、やり取り

**「よのなかとつながる Lab.」** 希望順番号 高田 先生 (1F 教室)

ニュースや新聞などから感じる「?」や「!」をもう一步自分ごととして深めてみませんか?様々なメカネを通して多様な見方をし、自分だったらどう思うかじっくりと考え、よのなかとつながるクセをつけてみましょう。

**「エネルギー Lab.」** 希望順番号 河野 先生 (第2理科室)

動く、光る、温かい冷たい、音などの現象は、エネルギーが元になっています。エネルギーを自分でつくってみたい、思い通りに使ってみませんか。それをコントロールするためのプログラミングも学びます。  
※ゲームはあつきます。

**「データ Lab.」** 希望順番号 稲垣 先生 (1C 教室)

〇〇をより速く、〇〇をより遅く、〇〇をより長く、…となるように、データを使って調べ、分析し続けてみませんか。  
〇〇にチャレンジ!!!  
この〇〇は、何がいいですか?

**「食 Lab.」** 希望順番号 今 先生 (家庭科室)

食ラボでは、関心を高めている「食」について本や資料、かんたん実験を通して考えを深めて研究していきます。食を調べるきっかけにして新たな「?」を発見してみましよう。無計画なただ食べるだけ、つけるだけの活動はしません。

**「プロフェッショナル Lab.」** 希望順番号 岸野 先生 (2E 教室)

世の中には、有名人以外にもたくさんの方々がプロフェッショナルがいます。その人のすごい技術や思いを知るために大切なのは、検索ではなく、インタビューです。人の姿に寄り、それを伝える番組、つくってみませんか。

**「ことば Lab.」** 希望順番号 清水 先生 (3B 教室)

①ことばを用いた表現活動。②ことばを用いた作品。③ことばを用いた研究する Laboratory です。①ことばを用いた表現活動とは、読むこと、書くこと、話すこと、聞くことです。②ことばを用いた作品とは、絵本や物語、広告、スピーチなどです。③ことばそのものは、ことばの特徴や働きなどです。

**「自由な算数 Lab.」** 希望順番号 難波 先生 (3E 教室)

皆さんは算数が「自由」だと感じたことはありますか?算数のおもしろさは、この「自由」にあるのです!算数のおもしろさを知りたい人、算数を使って探究することを楽しみたい人は、ぜひこの研究室にきてください!

**「ビジネス Lab.」** 希望順番号 沼田 先生 (2B 教室)

経済を回すってどういうこと?無料アプリで儲かるの?ローの仕組みってどうなってるの?このQ(なぜ)ってなんのため?効果あるの?流通ってなんだろう? Youtube やオンラインサロンって儲かるの?などなど、みんなの周りにある「ビジネス」のこと、知ったのもっと楽しくなる。

**「スポーツ Lab.」** 希望順番号 久保 先生 (3A 教室)

生活の身近なものとなったスポーツ、好きな人も多くいます。それを、もっと深め、もっと掘り下げてみませんか?「うまくなる」ことを目指すだけでなく、スポーツを考えることは、生きることや社会を考えることにもつながります。興味のある人はぜひ!

**「音楽深掘り」** 希望順番号 小山 先生 (集会室)

昨年度まで新藤先生が開いていた『音楽深掘り』と同じ内容の研究室です。ほくも個人的に『音楽深掘り』を音源から探しています。『例えば「動かす元気に動いている子ちゃんの動きは歌といえるのか...?」など。ジャンルは問いません。音楽の「なぜ?」を深掘りしてみませんか?

**「Science Colloquium」** 希望順番号 ~子ども科学者を目指そう~ 堀井 先生 (第1理科室)

自然の事象・現象を研究材料として物議的に議論を行う Lab.です。毎週2回の時間のうち、1回を研究活動の日、1回を議論の日にします。研究活動では、各自明確な目的意識をもって実験・観察・調査などを行い、議論では1名30分程度の時間をもって、プレゼンテーションと徹底的な議論を行います。

**「てつがつく Lab.」** 希望順番号 木村 先生 (2D 教室)

友達とは? 恋愛とは? 自分とは? 自分、何気なくつかっている「当たり前」も、よく考えると難しい。このラボは、「考える」ということのおもしろさを感じるためのラボです。世の中をうたがおう!

**「HIPHOP 研究所」** 希望順番号 長坂 先生 (1D 教室)

HIPHOP 研究所開設3年目となります。2年目までは、HIPHOP を研究の対象として自己表現を視点に、「つくる」ことを中心に各々が取り組みました。これまでのメンバーの研究成果と課題を基にして、自己表現してつくるモノやコトが何よりどのように貢献できるか、ということに迫ってみませんか?

**「みる・つくる Lab.」** 希望順番号 武田 先生 (第2造形室)

この Lab.には、形や色を試しながら表現することを追求したい人が集まります。それは、自分で色々な材料や資料を集め、それらをよくみて、自分はどうしたいのかを考えながら、つくり出すことに熱中する人たちのことです。

**「日本文化 Lab.」** 希望順番号 名瀬 先生 (英語室)

世界的にも日本のカルチャー(文化)って、ますます魅力を集めてますよね。そんな自分達の文化について、調べるだけでなく、体験し、楽しみ、日本の魅力を再発見していくラボです。最後にはその魅力を世界に発信していきましょう!

**「伝統 Lab.」** 希望順番号 栗田 先生 (3C 教室)

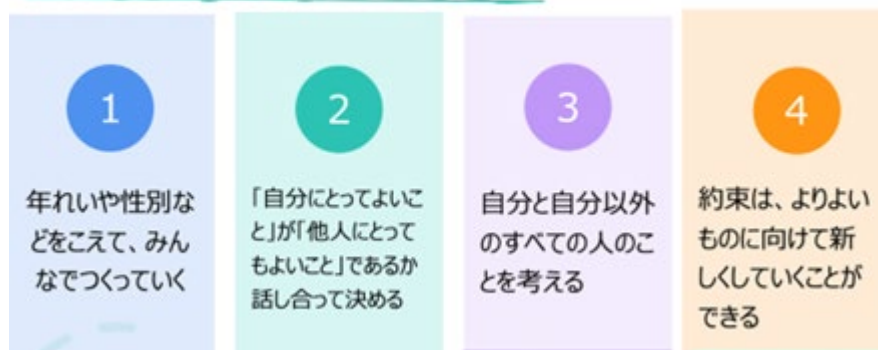
新しいものっていいよね!古いものがどんどん新しく変わっていく今の時代。でも、昔から変わらずに今もまっすぐいる伝統がある。演劇、技、祭り、道具、武、建物...など。なんでだろう。過去から未来へと続く伝統あるものの秘密を探っていく。

**2023 R5 Laboratory 研究室 一覧**

るようにした。学習内容や方法については、児童自身で選択できる環境にするが、何を選んでも Laboratoryとしての学びが成立するわけではないと捉えて、教師の介入を必須とした。その際、「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトでの汎用的スキル、態度・価値の測定尺度の項目を援用し、それらが発揮されそうかどうかを規準とした。(批判的思考力、問題解決力、協働する力、伝える力、先を見通す力、感性・表現・創造の力、メタ認知力の7つのスキルと他者に対する受容・共感・敬意、協力しあう心、好奇心・探究心、困難を乗り越える力、向上心、正しくあろうとする心、よりよい社会への意識の7つの態度・価値)

Home では、小学校における学び集団の成員の多様性を高めることにより、異質な他者を顕在化させた。その集団で何らかの意思決定をする際に、公正さを保とうとすると、年齢や能力、性別などの成員間の差異を考慮しなければならない。Home では生活をデザインするが、Laboratory での学習者個人が主体となるデザインと異なり、公共における自身の在り方に目を向けることが主となる。これは Home 内のことだけでなく、校内の Home 同士は同じ空間で生活を共にする関係であるため、Home 間においても公正さ、公共性を念頭に生活デザインを行った。延いては、学校外の他のあらゆる集団との関係においても公正さ、公共性を考え意思決定や社会をデザインすることを期待した。生活デザインの機会を設けるために、日常的に Home で食事や清掃、遊びを行った。また、入学や卒業の時期に儀式的行事をつくることや宿泊行事などをカリキュラムとして設定した。Home 担当教員は児童の生活デザインを見守りながら、公正さ、公共性が保てるように支援した。右図の 4 つの大事な考えとして年度当初に指導している。

## Homeで大事にする考え



Class では、基礎的基本的なことが習得できることと学びの履歴を可視化して蓄積していくことを重視した。学期ごとに学校独自のテストを作成し、学習状況の確認と復習による定着を図った。学びの履歴は、タブレット PC を用いてポートフォリオ作成を行った。この 2 つを用いて学期ごとに三者面談を行い、保護者にも学びを支えてもらうよう内容の説明と今後の方針を共有した。また、Class のカリキュラム・マネジメントを全教職員で行い、縦横断にスキルを関連させ、Class での学びの汎用性を感じることや活用すること、関連させることを図った。

## (2) 指導方法等は適切であったか

前述したように Laboratory の活動は、児童の興味・関心に合致し適切だったと考えられる。一方、どの Laboratory においても主体的に学習に向かうことが難しい児童も散見された。それは、それまでの教科学習における資質・能力や汎用的なスキルの獲得に問題がある場合、児童の性向、精神面など様々な原因が考えられる。まずは、教員の指導を見直すことが第一にあり、それ以外の場合においても Laboratory の時間が誰にとっても充実したものになるように改善していく必要がある。

1 つの Laboratory に 25 人を上限としたが教員に対して児童の数が多く十分に探究をフォローできない状況も散見された。一方、所属人数の少ない Laboratory もあった。一人一人の児童の公正な学びの機会としても教員の労務の平準化からしても、人数は均等割りにするほうが望ましい。現状の仕組みでなら均等割りにすると 1 つ当たり 20 人程度となる。これは、Laboratory の開設基準にもよる。できるだけ児童の学びたい対象や視点に沿って Laboratory を開設するようにしたが、対象や分野に偏りや重複が見られる。公教育として多様な学びの場を保障するために、児童が現時点で持っている希望だけに沿うことは適切でないと考え、より慎重に判断し、より広く Laboratory を開設する必要がある。

Home においては、次項で述べるが好ましい成果が多く見られる。異年齢集団で生活をつくることの学びの成果として考えられる。しかし、学校における多くの時間（全体時数の約 1/4）を使って行う必要があるかは精査しなければならない。令和 4 年度実践においては、初の Home 実践であり、探索的に行ったため目的的に活動することを控えたが、令和 5 年度は、それによって漫然とした時間になってしまっているという評価から、学校行事を設定し、それに向けて Home の活動と Home 同士



の交流を促した。目的的に活動することで漫然とはしなくなり、集団としての協働による結束等も高まった。また、他の Home との交流を促すことで他者への受容や共感も生じた。この活動が先鋭化したときに、目的に合致しない言動への排除や圧力が生じ集団内、集団間での分断が生まれることは想定でき、これでは従来の閉塞的な学級と違いがなくなってしまうことも考えられる。

Class においては、基礎的基本的な学習内容の定着のために本校独自のテストを行っている。業者によるテストとは違う視点で作成し、単純な知識再生型にならないように思考・表現や汎用的なスキルの発揮を重視したり、学校での授業の文脈を重視したりしている。日々の授業への参加を見直すこと、学びをデザインできる子として必要なことを自己調整しながら身に付けることを願っているが、一方、劣等感や不安につながる児童や保護者も散見される。学習観のずれによるものだと考えられるが、対話を通じて、よりよい学びのための環境づくりにつなげる必要がある。タブレットPCを用いたポートフォリオでは、単元末に振り返りをすることが学習の定着に効果はありそうだが、それを必要なときに引っ張り出してきて自在に活用することには至っていない。一覧性が低いことや手間がかかることも要因としてあるだろうが、まずは、履歴を使って縦横断に考えることを体験し、その良さを実感できるカリキュラムも必要だと考える。三者面談では、上記のテストのみならず、ポートフォリオを用いて自分の学びを説明できる児童も散見されるようになってきた。後述するが、Class での学びが Laboratory で使えたか、または使えそうかという問いの回答は、教科ごとにその割合や内容が異なった。汎用的なスキルを学びやすい教科と学習内容に強く印象が残る教科の可能性があるのか、児童が持っている学習観の影響があるのか、なども考慮しカリキュラム・マネジメントを行うことでより効果的に教科学習を行うことにつながると考える。

## II 実施の効果

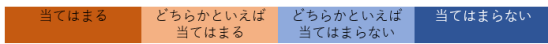
### 1 児童・生徒への効果

全国学力・学習状況調査からは、自己肯定感、責任感、チャレンジ精神、学習の活用、他者への共感性と援助行動、社会をよりよくする態度などにおいてポジティブな変化が見られた。ネガティブな変化としては、学校へ行くことの楽しさ、友人関係への満足度が下がった。

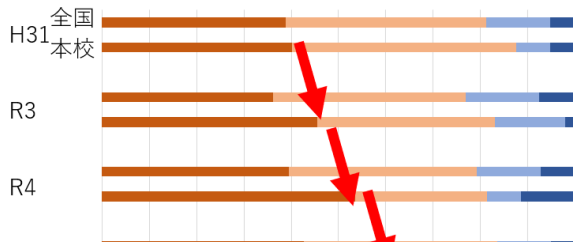
児童が活動する領域が Laboratory, Home, Class と複数になり、個人のもつ長所を出すことができる機会が増えたこと、複数の教員が関わり多面的に評価することで児童が承認される観点が増え自己肯定感の向上に影響していると考えられる。

Laboratory や Home では、試行錯誤する時間が保障されており、そこでの自己決定の機会や失敗を振り返り、次の改善に挑むことができる。また、Class で学んだ教科学習の内容や見方・考え方を使うことが増えた。これらのことが、責任感、チャレンジ精神、学習の活用度合いに影響を与えたと考えた。Home では、異年齢による他者との異質さが目立つ環境であり、違って当たり前であることを前提とする指導をしている。同級生の目を気にするような同調圧力や集団内の優劣を競争するような圧力も同学年集団よりも低い。これらの影響か、食事や掃除、遊びなどの生活面では援助行動を起しやすくなり、援助要請もしやすくと考える。このことが、他者への共感性や援助行動への意欲になっていると考えた。

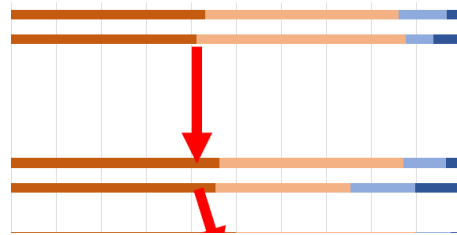
Home で生活することは、上述したような面もあるが、自分勝手や仲間内だけの心地よさは認められない。学校内での Home の時間を設けたことにより、これまで学級や学年で行っていたような運動会や宿泊行事などは目的も方法も変更した。そのことを惜しむ声が高学年（現 6 年生は、4 年生までは従来の教育課程で学んだ）の児童や保護者を中心に散見される。このことは学校の楽しさや友人関係への満足度に負の影響があると考えられる。



自分には、よいところがあると思いますか

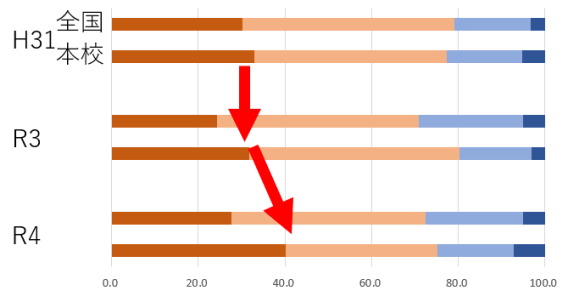
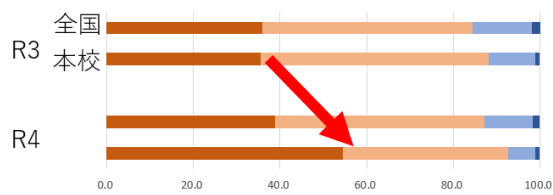


先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか

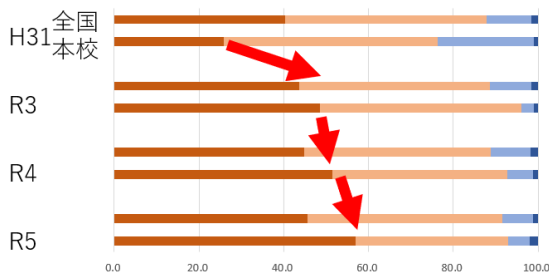


難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか (令和5年度なし)

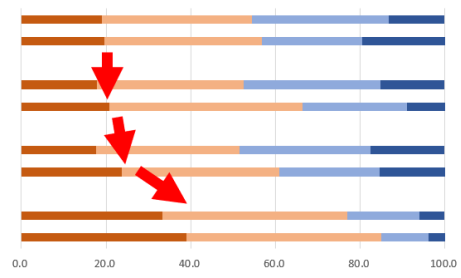
自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか (令和5年度なし)



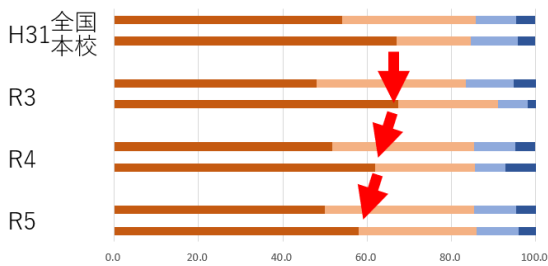
人が困っているときは、進んで助けていますか



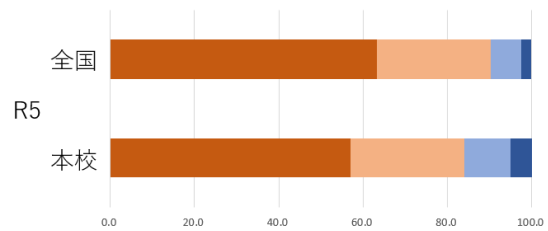
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか



学校に行くのは楽しいと思いますか



友達関係に満足していますか



## 2 教師への効果

前項で述べた変化は、教員へのアンケートにも多く見られる。関わる児童が増えたことにより、顔と名前が一致する児童が増え、学校全体で児童の育成に臨んでいる感覚は以前よりも強まっているように感じる。これにより、児童からのあいさつや会話も増えた。

以前は学年・学級での矮小化された範囲で最適化が図られる面があった。現体制では、教科担任制であり、Home 制であるため以前よりも個々の教員が最適化できる範囲が狭まっている。教員にとってはこれまで慣れ親しんだ学級経営や指導法が通用しないことにつながり、学び直しや価値の転換を行う必要もあった。これを新しい価値の発見ややりがいと捉える教員とストレスを感じたり、非合理的と判断したりする教員もいた。

### ・学校運営における変化

教員個人の裁量が狭まったことは上で述べた。個々の教員の影響力が均されることと共通の判断基準をもって指導に臨むことは、児童の様子とアンケート結果から概ね、ポジティブな要因になっていると考える。学校運営上も、透明性が高まり、一部の業務の効率化にもつながる。教員の指導力や内容の差による不平等感も薄まり子ども、保護者にとってもより平等で公正な学校運営につながる。

教科担任制や Home 制によって、教務上の時間割作成や学校内外への連絡、学籍管理、会計などのシステムが変更になり令和4年度の3領域全面実施初期には混乱と疲弊を招いたが、2年目は低減することができた。これらは継続的に改善することが可能である。

## 3 保護者等への効果

令和4年度の3領域全面実施時の6年生は最後の1年間で新教育課程に変わり、また新型コロナウイルス対策のため様々な活動が制限された。こうした状況は、保護者に失望と混乱を生じさせる要因となった。

Laboratory においては、児童の好きなことができている楽しそうであることや学びをデザインすることの価値への共感から9割近く肯定的な評価を受けている。一方で、自主的に学ぶことが難しい児童も2割ほどはいるため、手厚い支援を望まれている。保護者も新しい価値観をもつ教育課程のため、家庭での支えが教え込むことになるのではないかと戸惑う意見もアンケートには見られる。

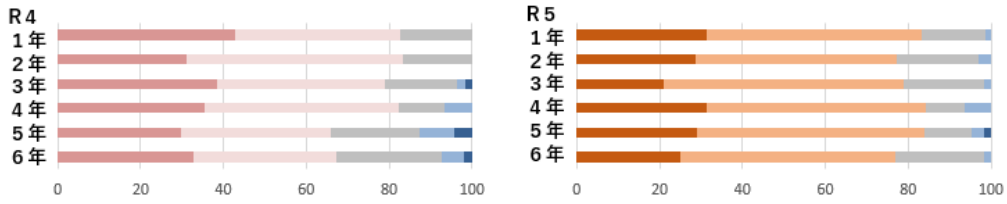
Home は、異年齢でいることの意味や価値は概ね通じ、支持されている。上の学年が良い見本になり、モデルとなることへの肯定もあった。しかし、Home の理念が満たされず、対話でなく、年齢や身体や声の大きさで意思決定が行われた場面も実際に起きてしまい、そのような体験をした児童、保護者は不安や不満を感じる。このようなことが起きないように指導と起きた場合にはその後の支援を丁寧に行う必要がある。

Class については、定期的なテストや面談で児童の学習状況が具体的にわかるようになったこと、教科担任制で授業の専門性が向上したことによる児童のポジティブな反応などから肯定的な意見が見られる。Home と Laboratory の設置により Class は授業時間数が標準時数よりも少ないため基礎学力の定着や中学校への進学の際の試験などにおいて不利益であるという否定的な意見もある。教科担任制のため教室移動や学習用具の管理などは従来の教育課程よりも複雑になっているため、非効率的であるという意見がある。

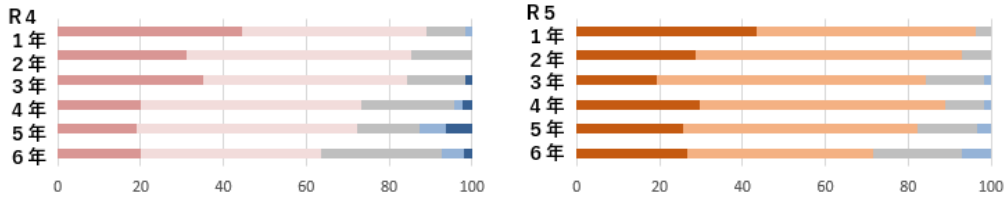
様々な教員が関わることの利点を上述したが、相談するための窓口が分かりづらいことや、面談を行う Home 担任があまり情報を持っていないという不安や不満もあった。

なお、保護者アンケートの回収率は高くなく、6割程度である。

「Home」の時間において自ら意欲的に生活に取り組んでいると思いますか



「Home」の時間について新しい発見や成果はありますか

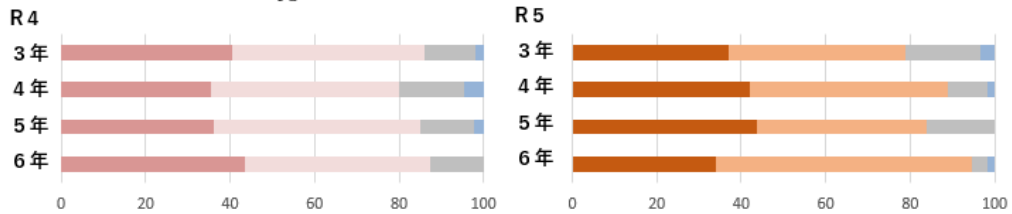


「Home」の時間について不安や課題はありますか

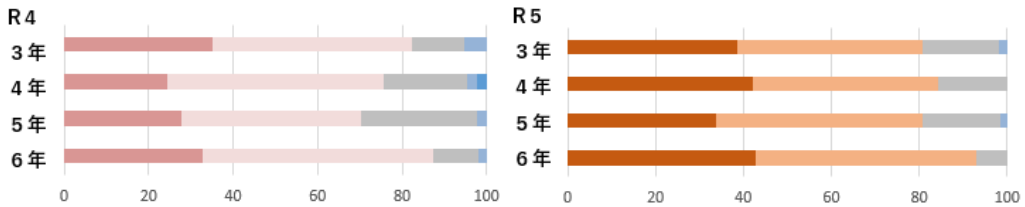


とてもそう思う    そう思う    どちらとも言えない    そう思わない    まったくそう思わない

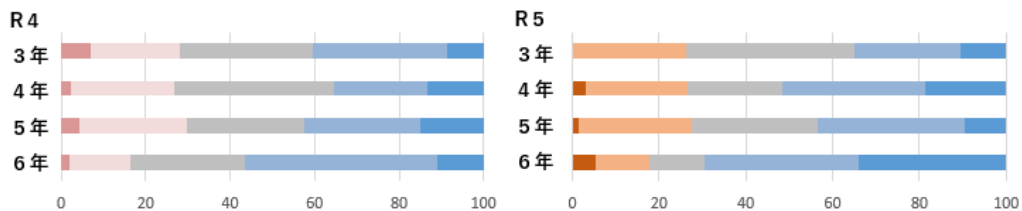
「Laboratory」の時間において自ら意欲的に研究に取り組んでいると思いますか



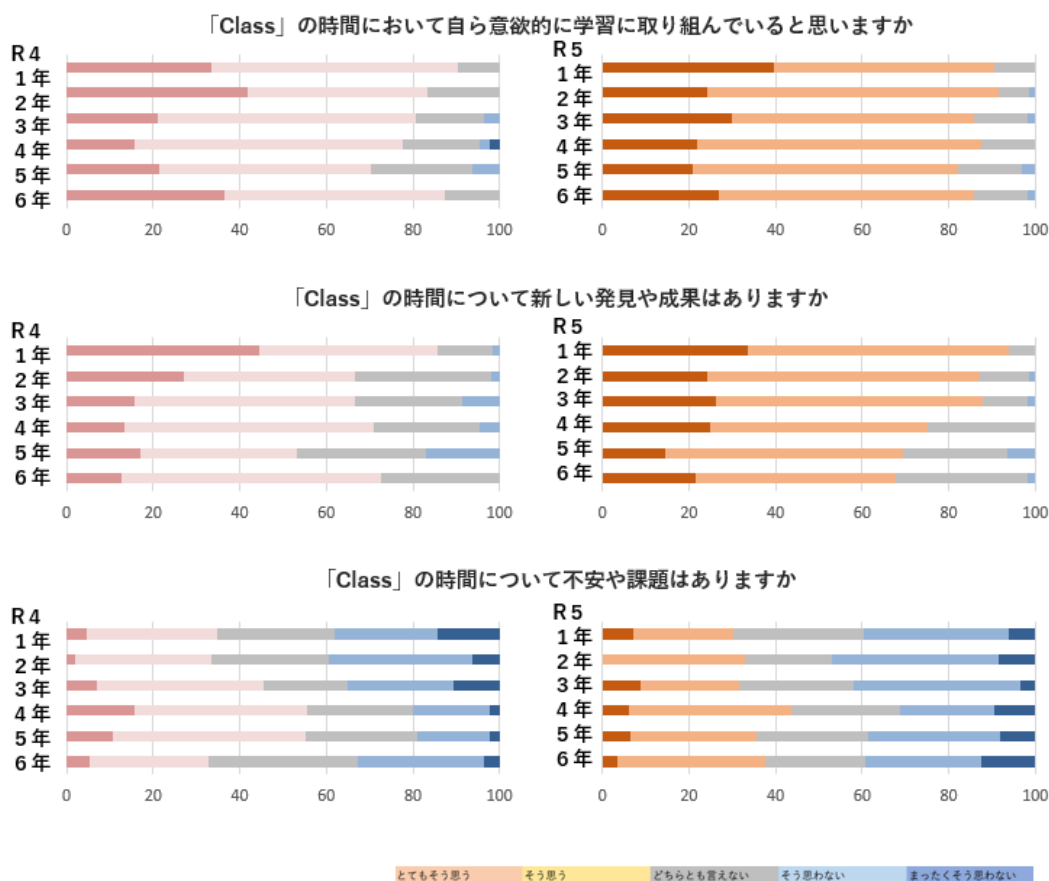
「Laboratory」の時間について新しい発見や成果はありますか



「Laboratory」の時間について不安や課題はありますか



とてもそう思う    そう思う    どちらとも言えない    そう思わない    まったくそう思わない



### Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

教育課程に大きな変更を加えたことによる変化も大きく、成果も見られたが課題も多く残った。児童、保護者の幸福を願い、丁寧な説明をして、了解を得ることはどこまで行っても不十分であるため反省とともに今後も励む。学校内の教職員にとっても変化は大きく、これも誠実に重ね続けていくようにする。

Home 制を実施したことによる抜本的な変化は成果として明確に出ている。全国学力学習状況の調査において教員の実感を裏付けている。しかし、この成果は、Class 時数の削減や従来の教育課程にあった活動の削減などがある。一般化するには、精査が必要であることと、規模や程度の検討が必要である。

Laboratory も Home も探索的に実施し、実感としての成果はあるものの公教育にとって妥当であるための評価に関しては十分にできていない。教科学習である Class での学びが Laboratory でのデザインの基になっていることが児童アンケートからもわかるが、その相関や因果は明らかではない。

今後は、本研究の課題を真摯に対応しつつ、成果として見られたことについて精緻化・一般化していき、児童と保護者、公教育と地域へ還元することを図る。